

平成23年度

第6回「SYDボランティア奨励賞」受賞者名簿



後援:文部科学省

社団法人中央青少年団体連絡協議会

「広がれボランティアの輪」連絡会議

公益財団法人日本レクリエーション協会

社団法人日本キャンプ協会

受賞者一覧

(敬称略・順不同)

文部科学大臣賞

- 善通寺市立東中学校 ボランティア部 (香川県)

優秀賞

【小学生の部】 御蔵島村立御蔵島小中学校 黒潮会 (東京都)

【中学生の部】 港区立青山中学校 お話会 (東京都)

【高校生の部】 岡山県立久世高等学校 家庭クラブ (岡山県)

【大学・一般の部】 西部点字パソコンサークル・ステップ (静岡県)

特別賞

- 大和市立渋谷中学校 (神奈川県)

- 新潟県立柏崎工業高等学校

防災エンジニアコース 3 年生、2 年生 (新潟県)

- 栃木県立栃木農業高等学校 村おこしプロジェクト外班 (栃木県)

- 出雲西高等学校 インターアクトクラブ (島根県)

- 播磨マリンクルー (兵庫県)

☆第6回SYDボランティア奨励賞には、44都道府県より小学生の部:3件、中学生の部:63件、高校生の部:76件、大学・一般の部:34件の計176件の応募があり、選考委員会において厳正なる選考の結果、上記受賞者が決定されました。

SYDは、1906年、東京府師範学校(現在の東京学芸大学)に学ぶ蓮沼門三を中心とする青年たちによって創立された社会教育団体です。“愛と汗の実践”を理念として「心の教育」一筋に歩み続けて 106 年、青少年の健全育成を中心とした様々な活動を行っており、今、みんなの幸せを願う「幸せの種まき運動」を全国的に展開しています。

文 部 科 学 大 臣 賞

■ 善通寺市立東中学校 ボランティア部 (香川県)

「4つの社会問題への僕らの挑戦」

ボランティア部は平成17年度からの6年間、主に①「讃岐のため池文化」の衰退と風化の問題、②道の汚れの問題、③道の危険性の問題、④瀬戸内海の離島の過疎の問題に取り組んできた。これらは地域のみならず県の抱える深刻で解決の難しい大きな社会問題だが、中学生が真摯に向き合って挑戦を続けてきた。

①「讃岐のため池文化」の保存と継承を目指して：ため池は水不足に苦しんできた讃岐の水文化のシンボルであり、貴重な文化遺産であるが、ため池密度が全国一でありながら、ため池を紹介するガイドマップやガイドブックが一冊もなく、その歴史や物語を知らないため、ため池がふるさとの美や誇りであるとの意識も希薄であった。部員は約1年間かけ、ため池の史実を文献や聞き取り調査で調べ、冊子とDVD「ふるさと善通寺のため池物語」を制作、公開した。その後9か月をかけて県内全域の約200個の池を訪れて写真撮影し、中から68個の池を選び、県内初の「ため池写真展」を開催した。

②道の再生～ごみと犬のフンで汚れた市道を、美しい花の道に変える～：市内で最も汚れている市道を美しくするため、部員はこの道の里親となって植樹帯に花を植え、毎朝7時過ぎに登校し、往復400メートルの植樹帯の2000本の花の世話と道の掃除を続け、4年経った現在、ごみや犬のフンほぼ消え、市の「おすすめ花スポット」として、観光ガイドブックに掲載される「花の道」になった。また、スポーツ感覚で楽しみながら、効率よく道のごみが拾える「競技ごみ拾い」も創案した。

③市内の交通事故発生件数を減らす～善通寺市交通ハザードマップづくり～：香川県は人口あたりの交通事故発生件数が8年連続して全国1位という、危機的な交通状況にある。部員は市内交通事故の発生場所一覧を基に「交通事故発生場所マップ」を作成し、事故が限られた場所で繰り返し発生していることが分かったため、その現場に行き事故誘発原因を推定し、交通事故発生予測地図(「善通寺市交通ハザードマップ」)を作成した。

④「掃除応援団」～過疎の島の小中学校や、島の人々と交流する～：全校生徒が1名の離島の小学校や中学校を訪れて交流し、年6回ほど島を訪れて「掃除応援団」として交流を深めている。

これらの活動を通して、部員たちは地域や香川県をふるさととして大事に考えるようになった。これらの課題を切り口として、今後もふるさとを学び、大切にしていきたい。

<「花の道」づくり>



<市道の清掃>



<「ため池の四季写真展」の作品>



<全校生徒1名の離島の小学校の運動会へ友情参加>

優 秀 賞

【小学生の部】 御蔵島村立御蔵島小中学校 黒潮会 (東京都)

「 奉 仕 日 」

本校は東京都心の南約 200km の太平洋上に位置し、島北部にある唯一の学校であり、児童生徒会を黒潮会と称している。昭和 3 年頃に当時の学校長の提唱で毎月 3 回、五の日(5 日、15 日、25 日)を「奉仕日」と名付け、この日は村内を清掃する日と定め、以来 80 年以上にわたり受け継がれてきている。

80 数年間には様々な紆余曲折・変遷があり途絶えそうになったこともあったが、現在この活動は生徒会活動の中のボランティア活動として、朝 6 時 30 分に小学校 1 年生から中学校 3 年生までの全校児童 20 名、生徒 9 名の 29 名が 3 班に分かれ、黒潮会会長や役員の児童生徒がリーダーとなり、下級生を指導しながら実施している。

昭和 3 年以来の伝統を守りながら年間を通して活動し、近年は教職員も児童生徒と一緒に活動するなど学校挙げての奉仕活動となっている。このことは「奉仕」の精神を養ったり、勤労を尊ぶ心を育てたり、環境教育の一つとしても大きな成果になっている。さらに観光を村の重要施策の一つとして、東京版エコツーリズムを進める村役場や村民などから厚く支持、感謝されるなど間接的な成果も上がっている。清掃し集まった塵芥類は地域の方に一時的に預かっていただき、ゴミ収集日時に出していただく等の協力を受け、それらの家庭に黒潮会役員がお礼に伺ったり、村内でのあいさつ等地域と学校の連携や交流の場にもなっている。

84 年間にわたり中断することなく、子供たちに連綿として受け継がれてきたこの活動を今後もさらに充実させながら「奉仕日制定 100 周年」を目標に継続させていきたいと考えている。



＜昭和 30 年代 海岸への道＞



＜昭和 30 年代 郵便局前＞



＜平成 18 年 1 月の奉仕日＞



＜平成 23 年 11 月の奉仕日＞

【中学生の部】 港区立青山中学校 お話会 (東京都)

本校は都会に位置しながらも、地域との連携を大切にし、地域社会に愛される生徒の育成に力を注いでいる。その方策の一つが、学校図書館の積極的な活用であるが、平成 14 年から区の方針で各小中学校図書館にスタッフを配し、図書館の活性化と中学生の意識改革に取り組んできた。

取り組みは、マイナス思考が強かった生徒達が、人を楽しませる喜びを味わうことで、自分に自信を持ち、積極性、自主性を身につけることができるのではないかと考え、生徒たちが図書館に集まり始めた平成 16 年に、生徒達自身が主体となって行う「お話会」の開催を提案した。

その後、会を重ねるうちに校内での定例活動だけでなく、活動の場を広げたいとの要望が生徒達から出されるようになってきたので、区立図書館や中学校のホールでの公開お話会、近隣小学校の放課後事業、児童館での読み聞かせボランティア活動、さらに地域の公開講座や区民の集い等の朗読会参加などを行い、通算実演回数も 154 回となった。

この活動の特徴は、中学校で中学生向きのお話会を中学生自身が行い、賛同者を増やしなが、地域への活動へと広げて行っている所にある。生徒の誰もが気軽に参加できるように、委員会や部活動という枠をなくし、学校全体で協力体制を作り、PTA や地域の方々と連携を取りながら、多くの生徒が関わりを持てるよう細かく担当を分けて行っている。また、聞いていただく方々や、小学生などに興味を深めてもらえるように視覚に訴えたり、クイズを行ったり、手作りおもちゃの時間を取ったりと飽きずに楽しめる工夫も行っている。

ここ数年、朗読会では事故や病気等で大切な家族や友人を失った方々の心境が綴られた手記等を朗読し、参加者すべてが命について真剣に考える時間を持つことができた。それを基に、今年は東日本大震災での「被災地からの声」の朗読を行い、東北への思いを深め、地域との強い絆が生まれている。

委員会や部活動で活躍している生徒だけでなく、消極的な生徒や課題のある生徒達もお話会に参加し、読み聞かせボランティアの楽しみを体感し、生き生きとした姿が見られることは大きな成果である。中学生が活動できる場は多くはないが、中学生ならではの「心をつなぐ」活動が広がるように今後も努力して行きたいと考えている。



＜巻物を使ってお話会＞



＜児童館でのお話会＞



＜区民のつどいで朗読＞



＜小学校でのお話会＞



＜区民センターでのお話会＞

【高校生の部】 岡山県立久世高等学校 家庭クラブ (岡山県)

本校家庭クラブは、家政科の生徒 44 人で組織され、長年、保育所や高齢者福祉施設への訪問や高齢者へのハガキによる訪問、校内外清掃や JA 主催の児童スクールのサポート等、年間を通して様々な活動を行っている。中でも、一人暮らしの高齢者への暑中見舞い・年賀状等のハガキ訪問は 30 年以上、通学途中にある橋の清掃は 48 年間続いている活動である。

また、3 年前より地域と協力して「食」を通じた交流活動に力を入れ、年間 3 回程度、本校に園児を招いて「食」と「農」を中心とした食育交流活動を実施している。本校の田圃で野菜と一緒に植え、育て、調理することを通して、様々な食育活動に取り組んでいる。2011 年 5 月には、市内 3 園の園児 78 名、地域の方々 48 名を招き本校生徒職員も参加、約 450 名を対象とした食育交流会を実施し、校庭でカレーライスを食べる異世代交流を行った。

昨年度は、園児が楽しく遊びながら食に興味を持つきっかけになるようにと思い「食育かるた」を考案、作成した。実際に遊んでもらい、「読み札が難しい」「絵札が何か判らない」「サイズが大きい」等の指摘を改善して、園児が自分たちで遊べるように、全て「かな」表示とする、リズムよく読めるように読み札を五七五に統一する、サイズを園児の手の大きさにする、そして、わかり易いイラストにする事で、真庭市協賛で製品化していただき、かるたを入れる袋をクラブ員が作成し、市内の 42 園に贈呈した。その内の 2 園にクラブ員が出向き、贈呈式の後、一緒にかるたで遊ぶことができた。

私達はクラブ活動を通して、地域から期待されている存在である事を実感してきたが、家政科は来年度で閉科となります。先輩から引き継ぎ地域と共に歩んできた家庭クラブが無くなることは残念ですが、これまで食育活動を通して築いてきた地域との絆が新しい真庭高校へとつながる様に、これからも積極的に地域と関わる活動に参加し、地域に愛される活動を続けて行きたいと思っている。



＜一人暮らしの高齢者へのハガキ訪問＞



＜通学路「中川橋」の掃除＞



＜食育交流「あぐりにこにこスクール」＞



＜製品化された「食育かるた」と贈呈式＞



【大学・一般の部】 西部点字パソコンサークル・ステップ（岩手県）

当団体は、平成 7 年 11 月に開催された盛岡市西部公民館主催講座「西部点字パソコン学習会」を修了した有志 8 名が、その習得技術を視覚障害者のために役立てたいと設立したボランティアサークルである。県立盛岡視覚支援学校の生徒を始めとした県内の視覚障害者の読書に少しでも貢献したいとの気持ちから積極的に活動を行ってきた事で、現在は 45 名の会員数となってきた。

活動は週二回公民館に集まり、パソコン点訳を行ってきた結果、今年度は盲学校、地方公共団体、放送会社、個人等へ教科書、参考書、受験問題集、一般図書等の点字本を作成し配布した。また、盲学校図書館でのボランティア支援、公民館での点字図書貸出・点字ボランティア養成講座支援、パソコン点訳の啓蒙活動も行ってきた。さらに、今年は盲学校創立 100 周年を記念して、当団体から「宮沢賢治全集（岩崎書店刊全 12 巻）」、「はり・きゅう・マッサージ国家試験問題集、参考書」等を贈呈した。宮沢賢治全集は、作者が岩手県出身であることから盲学校小学部の全盲生徒からこの全集を読むことを大変楽しみにしている、との感謝の言葉を頂いた。

現在、書籍は店頭には溢れているが、視覚障害者の読める点字本は非常に少なく 10 分の 1 にも満たないのが実情である。特に新刊書や専門書は少なく、視覚障害者の読書に対する要望に対処していくことが課題となっている。また、近年は盲学校生徒の大学進学者も増えているので、専門書に対するニーズにも対処したいと考えている。また、東日本大震災に伴う大津波により甚大な被害が発生しているため、三陸海岸地区の小中学生や視覚障害者に対する津波教育と点字教育の一環として「三陸海岸大津波（吉村昭著）」と「つなみ（パールバック著）」の点字本兼墨字本（目の見えない人も見える人も読める本）を作成して、県内小中学校や視覚障害者団体等に贈呈すべく点訳作業を開始している。

今後は、多様化する点訳ニーズに適確、迅速に対処するための機械化の推進や、会員のスキルアップや増員により、点字本の作成拡大に努めて行きたいと考えている。



＜点字養成講座＞



＜小学校で福祉講座＞



＜視覚支援学校での図書ボランティア＞



＜視覚支援学校 100 周年記念式にて点字本贈呈＞

特 別 賞

■ 大和市立渋谷中学校.....(神奈川県).....

本校は平成 16 年に新校舎が建設され、現在の地へ移転してきた。その時制定された基本理念は「地域に根ざし、地域の未来を担う学校」であり、その中心となるのがボランティア委員会によるさまざまな地域での奉仕活動である。学校周辺の清掃活動、福祉施設・養護施設や近隣幼稚園・保育園でのお手伝い、地域商店街や自治会等のイベントの司会、進行等々その活動内容は多岐にわたっている。また、始業前に個人ができる時に参加する学校周辺のゴミ拾い活動や校外清掃活動等は生徒会ボランティア委員会が主体となり実施している。

老人ホームの慰問や自治会主催の夏祭りの手伝い等は学校創立以来の伝統であるが、近年の特徴的な活動としては地域と一体となった校外清掃活動である。これは本校生徒が中心となり地域自治会、青少年関係団体、学区内小学校と合同で実施するもので、毎回 300 人近くの参加者がある。年 3 回の活動だが、地域の恒例行事となり環境美化に大きく貢献している。

また、隣接する幼稚園での運動会や餅つき大会等でのボランティア活動もある。特に中学校での運動会には幼稚園児が全員参加し、中学生との合同種目があり、ボランティア活動をきっかけにして『幼中連携』という新しいスタイルができています。

本校は、生活保護家庭と要保護家庭(就学援助受給家庭)が在籍生徒数の 51%を越えており、50 名前後の外国籍生徒も在籍し、家庭状況や日本語の習得不足その他の理由から課題を抱える生徒も多い。そのような中で、日本語が不得手な外国籍生徒でボランティア活動がきっかけとなり再び学校に足が向き始めたり、活動に参加し感謝されたことで自己肯定感の認識し元気を取り戻したり、とボランティア活動が生徒の人間関係作りや本校への適応、国際教育の面においても大きな役割を果たしている。

今後も地域との双方向性の交流をさらに活性化させ、言葉や習慣の異なるさまざまな国籍の生徒たちが奉仕活動を通じて友情を深め、認め合い、お互いに人権意識を高めて行っていきたいと思っている。



＜学校周辺の清掃活動＞



＜福祉・養護施設での交流＞



＜地域イベントへの参加＞



＜『幼中連携』餅つき大会と運動会＞



■ 新潟県立柏崎工業高等学校

防災エンジニアコース 3 年生、2 年生（新潟県）

.....

本校防災エンジニアコースは、平成 16 年の中越地震、平成 19 年の東日本大震災と続いた大地震での被害から防災教育の重要性が高まり、防災関連の授業や実習の他、ボランティア活動、地域との連携活動、学校外活動を進め地域貢献との両面から柏崎市の防災の町づくりに参加・協力して行くことを目的として、平成 21 年に新設されたものである。

東日本大震災以降のボランティア活動は、①福島県より避難された方々の避難所での、支援物資仕分、清掃、炊き出しの運搬、子ども達の遊び相手等春休みの 3 週間、2～4 名が連日交代で実施。②長野県栄村で地震の被災現場からの震災ゴミの分別作業を 3 月に 21 名で実施。③仙台市宮城野地区ボランティアセンターでの後片づけ、岡田地区農家の泥の取り除き作業を 4 月に 13 名で実施。④本校 PTA 主催の仙台市宮城野地区、東松島市での民家や側溝の泥出しを 6 月に 94 名で実施。⑤気仙沼市唐桑港の民家の床下泥出し、瓦礫の後片づけ等を 7 月に 9 名で実施。⑥三条市の豪雨被害による民家の床下泥出し等を 8 月に 10 名で実施。⑦防災ボランティア合宿で福島県只見町の水害現場での実地活動-土砂の取り除き、配付荷物の袋詰め等を 8 月に 19 名が参加。

東日本大震災以降、防災エンジニアコースの生徒は今できる活動を今すぐに実行すべきと、活動を行ってきた。多くの被災者の方とコミュニケーションを持つことで、普段の生活で無関心である事の罪や小さな事に対する積極性の重要さが理解できるようになった。

本校の防災教育は授業以外にも、市と連携しての消防署体験学習、防災合同訓練への参加、県外校との防災キャンプ等様々な取り組みも実施している。ボランティア活動もその重要な活動の 1 本の柱としてとらえ、今後も可能な限り実施したいと考えている。

＜宮城県仙台市、東松島市での活動・民家や側溝の泥出し＞



＜福島県只見町での活動・土砂の取り除き＞



＜長野県栄村での活動・震災ゴミの分別＞



■ 栃木県立栃木農業高等学校

村おこしプロジェクト班（栃木県）

本校周辺の山麓一帯では400年以上も前から麻の栽培がおこなわれ、野州麻の銘柄で日本一の生産量を誇っている。麻の栽培は山間地農業を支え、下野の地場産業として暮らしの中で生きてきた。しかし、過疎化、後継者不足等により麻の生産農家が減少し、現在は8戸の農家が残るだけとなった。さらに65歳以上の高齢者が人口の半数を超え、生活を維持するのが難しい「限界集落」となり、耕作放棄地が増し、村が寂れてしまった。

そこで、本校環境学部では、農業高校の特性を生かし、平成17年より「麻の郷」栃木の産業と自然環境を守るために“村おこしプロジェクト班”を立ち上げ、現在28名の部員が活動をしている。

私達は麻の播種、中耕作業、麻の刈り取り等援農実習を行ってきた。その中で、播種機、麻風呂、麻切り包丁等昔からの様々な道具が使われるが、それらは古く使いづらい状態になっていたため、修繕作業にも取り組んだ。

また、林業の低迷や農業の衰退などにより自然環境が破壊され、イノシシ、シカ等の野生鳥獣による農作物の被害が増え、農家では電気柵や鉄条網等の対策を進めているが、設置経費や労力などの問題で普及が進んでいない現状を知り、野生動物との共存を目指した環境に優しい麻縄の開発を行った。これは野生動物による農作物への被害を防ぐため、麻縄にトウガラシ、ハーブ、ドクダミ等刺激臭のある液体を浸み込ませ、鳥獣害対策への活用を模索し、ベンチャー企業と協力し、「環境にやさしい動物ロープ」と名付け、製品化することができた。この麻縄は鉄条網や電気柵よりも安く、設置が簡単で「天然素材で環境に優しい」と高く評価され、農林水産省のエコマークや特許を取ることができた。この麻縄は「駆除」から「共生」への第一歩であり、里山の農村社会と野生動物が共存するための一考として注目されている。

私達は先祖から何代も受け継がれてきた「美しい日本の原風景」を後世に伝える担い手として、今後も地域おこしに携わっていき、里山里地の集落の人達と協働で「農業が元気になれば、山村はよみがえる」を合い言葉に、豊かな農村と共存できる環境を次の世代に継承して行きたいと思っている。



＜麻農家での刈り取り作業（7月の暑い中背丈よりも高い麻を1本1本抜きとる作業は重労働です）＞



＜麻干し（1週間くらい干す）＞



＜「環境にやさしい動物ロープ」の設置支援＞



＜伝統食材であるそば打ちの伝承＞

■ 出雲西高等学校 インターアクトクラブ (島根県)

本校インターアクトクラブは、1966年に設立されたボランティアクラブで、現在46名で、環境保全と国際支援を中心に活動している。

環境保全活動に取り組むきっかけは、40年間行っている海岸清掃である。清掃ゴミを分別すると、その大半以上が海外からの流入ゴミで、注射器や点滴機材などの危険物も多くあった。その現実には、マスコミを通して報道していただいたことで、反響を得ることはできたが、自分達でも何か出来ないかと考え、海をきれいにするには海に注ぐ河川を、さらには川をつくる森を育てる必要があると思い、10年前より雲南市にある尾原ダム周辺の山に緑を取り戻そうと「どんぐりの森づくり」を行い、現在までに33万本植えられた。また、里山を森へ復元する「1000年の森づくり」でタブノキ、アカガシ、モチノキ等の植林活動も行った。

5年前からは県からの依頼で宍道湖の水質調査を行い、その主原因である「生活排水」を浄化するため、葦の植栽を行ってきた。また、2年前からはEM菌を使った水質浄化活動も行っている。出雲市内の小中学校のプール清掃にEM菌を使うことを呼び掛け、児童と共に清掃も行ってきた。さらにEM菌を使った活動では、出雲市内を流れる赤川にホタルを呼び戻そうと、EM団子作りにも取り組んでいる。

国際支援を行おうという活動は10年前から始められ、未使用の文房具を集め、募金活動等を行ってきた。今年はフィリピンのゴミ山で生活する子ども達にそれらの文房具を渡すためSYD協力のもと、本校から4名、他校のインターアクトクラブからの生徒、教諭計12名で渡比、一人30kgの文房具と集まった浄財を届けた。フィリピン研修では、人の幸せとは何だろうとか、物質よりも精神の大切さを知り、とても勉強になった。今後も、フィリピンの子供達の支援活動は続けて行きたいと思っている。再び、フィリピンを訪れる際には川や海の浄化ができるようEM団子による環境保全にも励みたいと思う。

<海岸清掃活動>



<「千年の森づくり」植林活動>



<国際支援・フィリピン>



<支援の文房具で絵を描く>



■ 播磨マリンクルー (兵庫県)

「出前授業&高砂沖底引き網漁体験学習」

高砂市は海岸線の白砂青松が美しい景勝の地だったが、播磨臨海工業地帯の中核として工場の誘致等により、遠浅の海や浜辺など子ども達が自然環境から学び、遊ぶ場としての機会がなくなってきた。

播磨マリンクルーは 10 年前、子ども達が持っている知的好奇心を引き出し、自然の恵みや不思議さを体感してもらいたいと考え、地域における子育て支援グループとして活動を始めた。当初は、タツノオトシゴ等の生態やタコの出産等をビデオ撮影したものを資料として小学校を中心に伺っていたが、その後、幼児児童が海の生き物とふれ合うことのできる「出前水族館」として、高砂沖で獲れたタツノオトシゴ、タコ、アナゴ、カニ、エイ等を持参し、タッチプールとして素手で触り体感する活動を始めた。また、漁業協同組合の方々の協力を得、高砂沖での「底引き網漁体験」を実施し、子ども達に海の雄大さ、“いのち”の営みや自然と人間との繋がりを意識してもらえると共に、網にかかったゴミから環境保全について考える契機にもなっている。

平成 20 年からは、海で聞こえる波の音や船の汽笛、クジラの鳴き声等を聞いたり、貝殻を使った楽器の制作、海の生き物等を子ども達の希望に応じて切りだす「切り絵」や「折り紙」も「出前水族館」とセットで始めた。これらのスタッフは高齢者大学の出身者や在学生の 60・70 代を中心に若い人員も加わり活動の幅を広げている。さらに、活動地域も高砂市を中心に、加古川市や明石市等の東播磨全域に広がってきている。

今後、子ども達が自由に活動できる自然環境が減少し、生き物とふれ合う機会も限られると考えられるが、「海」をテーマにした体験活動を通して、子ども達の五感を使う場を提供し、創造力・観察力を高めることのできる企画を進めて行こうと思っている。



<「出前水族館」生き物とのふれ合い>



<「出前水族館」海の生き物の“切り絵”>



<「出前水族館」貝殻を使った楽器作り>



<底引き網漁体験」底引き網漁船>



<「エイ」を捕まえた！>



<引き上げたヒラメを調理>

SYDボランティア奨励賞 実施要項

公益財団法人修養団では、昭和57年より平成13年まで「蓮沼門三社会教育奨励賞」により多くの優れた社会教育活動を実践した個人、グループ・団体を顕彰して参りました。この実績を踏まえ、平成18年に創立100周年を記念し、新たに「愛と汗の精神」を信条とする《幸せの種まき運動》の実践者を顕彰する「SYDボランティア奨励賞」を設立しました。

主 催：SYD（公益財団法人修養団）

後 援：文部科学省、社団法人中央青少年団体連絡協議会、公益財団法人日本レクリエーション協会、社団法人日本キャンプ協会

1. 趣 旨

今日、次代を担う青少年の健全育成はますます重要な課題となっている。そこで、ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげたグループや個人を顕彰することにより、青少年のボランティア活動を促進するとともに、活動の習慣化を図り、生きる力や豊かな心を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2. 対 象

原則として、ボランティア活動を実践している学校（生徒会、クラス、クラブ等）やPTA、子ども会等のグループ及び個人

3. 選考基準

次の項目に該当し、高い評価を得られたもの

- (1) ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげ、今後の活動に期待のできるもの
- (2) ボランティア活動に創意工夫や新しい方策を取り入れ、新機軸を拓き、今後の活動に期待のできるもの
- (3) ボランティア活動を受け入れ、施設の利用、改善、充実に努め、活動の活性化に寄与している施設またはそれを推進する活動
- (4) 青少年の健全育成を目的としたボランティア活動を実践し、将来が期待されるグループ及び個人

4. 選考方法

学識経験者等9名に選考委員を委嘱し、選考委員会にて決定する。

5. 表 彰

文部科学大臣賞 1点

クリスタルトロフィー(表彰状)、副賞(活動奨励金20万円またはSYD「青年ボランティア・アクション in フィリピン」へ2名招待)

優秀賞

4点(小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)
クリスタルトロフィー(表彰状)、副賞(活動奨励金10万円)

特別賞

数点(小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)
クリスタルトロフィー(表彰状)、記念品

6. 贈 呈 式

期日:平成24年2月11日(平成23年度)

会場:SYDホール

7. 募集方法

都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体、学識経験者およびSYD組織、関係者に推薦を依頼するとともに、新聞、雑誌等のマスコミに広報を依頼する。

8. 応募方法

所定の様式に必要事項を記入し、活動報告書の上に添付して下記まで送付する。

9. 締め切り

平成23年12月1日(平成23年度)

10. 申込み・問合せ先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-2 SYDボランティア奨励賞 係
TEL:03-3405-5441 FAX:03-3405-5424 E-mail:info@syd.or.jp <http://www.syd.or.jp/>

選 考 委 員			
青柳	修治(全日本中学校長会事務局長)	明石	要一(千葉大学教授)
大野	曜([公財]日本女性学習財団理事長)	仲野	好重(大手前大学教授)
長沼	豊(学習院大学教授)	山田	一功(日本PTA協議会相談役)
國分	正明([公財]修養団理事長)	山崎	一紀([公財]修養団専務理事)
青木	富造([公財]修養団青年部長)		

過去受賞者一覧

(敬称略・順不同)

第1回(平成18年度)

文部科学大臣賞

◆京都市立京都御池中学校(京都府)

優秀賞

*【高校生の部】該当なし

【小学生の部】鏡石町立第一小学校(福島県) 【中学生の部】庄原市立東城中学校(広島県)

【一般の部】合同ボランティアネットワーク(神奈川県)

特別賞

◆国崎翠・吉居夏奈(北海道) ◆美幌町青少年育成協議会(北海道) ◆喜多方市立山都第一小学校(福島県) ◆熱海市立小嵐中学校(静岡県) ◆加藤ひとみ(岐阜県) ◆伊江村立伊江中学校(沖縄県)

第2回(平成19年度)

文部科学大臣賞

◆香川県立多度津水産高等学校(香川県)

優秀賞

*【小学生の部】【一般の部】該当なし

【中学生の部】木更津市立鎌足中学校(千葉県)

【高校生の部】学校法人高倉学園豊橋中央高等学校(愛知県)

特別賞

◆天草市立城河原小学校(熊本県) ◆志布志市立通山小学校(鹿児島県) ◆東横学園中学・高等学校 中学2年(東京都) ◆多治見市立多治見中学校(岐阜県) ◆神奈川県立相原高等学校「相こっこプロジェクト」(神奈川県) ◆熊本県立盲学校(熊本県) ◆立命館大学国際部国際協力学生実行委員会(京都府) ◆ブラジルを美しくする会(ブラジル)

第3回(平成20年度)

文部科学大臣賞

◆学校法人篠ノ井学園 長野俊英高等学校 郷土研究班(長野県)

優秀賞

*【小学生の部】該当なし

【中学生の部】新宮町立新宮中学校相島分校 相島少年消防クラブ(福岡県)

2008年度屋久島町立小瀬田中学校2年生「笑顔」プロジェクト(鹿児島県)

【高校生の部】更級農業高等学校 農業クラブ 農業応援団「ねこの手隊」(長野県)

【一般の部】八雲ジュニアサポーターズクラブ(島根県)

特別賞

◆尾道市立三幸小学校(島根県) ◆鳴門市第一中学校 ボランティア部(徳島県) ◆富山県立小杉高等学校 生徒会(富山県) ◆富貴中おやじの会(愛知県) ◆高知市朝倉里山を造る会(高知県)

第4回(平成21年度)

文部科学大臣賞

◆豊田市立崇化館中学校 麦の会(愛知県)

優秀賞

*【一般の部】該当なし

【小学生の部】日吉子どもサミット(滋賀県) 【中学生の部】名古屋市立はとり中学校(愛知県)

【高校生の部】中央学院高等学校 生物部(千葉県)

特別賞

◆SYD北海道クラブ(北海道) ◆横浜市立岡村中学校(神奈川県) ◆長野県飯田風越高等学校 国際教養科3年(長野県) ◆みんなでつくる学校 とれぶりんか(大阪府) ◆広島文化学園短期大学 食物栄養学科(広島県)

第5回(平成22年度)

文部科学大臣賞

◆高知大学 高知子ども守り隊 守るんジャー(高知県)

優秀賞

【小学生の部】御前崎市立御前崎小学校(静岡県) 【中学生の部】京都市立嵯峨中学校(京都府)

【高校生の部】江楠学園 北陵高等学校 生徒会(佐賀県)

【一般の部】東海大学海洋学部環境サークル E.C.O(静岡県)

特別賞

◆清水町立清水中学校 劇団8・9組(静岡県) ◆宮城県立塩釜高等学校地域活性化班 塩釜ぼんぼん(宮城県) ◆愛知県立日進高等学校(愛知県) ◆京都精華大学 ホスピタルアートボランティアグループ(京都府)